

## “社会安全学”を实社会で実践したい

企業のCSR・コンプライアンス部門での活躍を目指す

●社会安全学部3年次生  
小野山 伸和 さん

2010年に新設された社会安全学部の1期生が、いよいよ12月から就職活動を開始する。国内外で自然災害が相次ぎ、安全安心に対する意識が高まるなか、1期生はどのようなことを学び、身に付け、社会に羽ばたこうとしているのか。社会安全学部の祭典実行委員会を立ち上げ、また社会安全学部などが主催する第3回「東京シンポジウム」でポスターセッションに参加した小野山伸和さんに話を聞いた。



小野山さんが2年前、新設されたばかりの社会安全学部を受験しようと思ったのは、乗っていた電車の吊り広告を見たことがきっかけだった。「社会安全学部という初めて聞く名前が開設されることを知り、面白そうだなと思いました」。時代の流れそのものが安全安心にシフトしてきたという背景もあり、社会のニーズにも合っていると感じた。入学の翌年にあたる2011年3月に東日本大震災が起き、ますます社会安全学の必要性を痛感したという。

「しかし入学当初は法学、政治学、経営学、心理学、哲学、行政学など、さまざまな分野にわたる授業が多く、自分が何を勉

強しているのかわかりませんでした。付いていくのに必死でしたが、いろいろな先生の話を理解できるようになって『安全安心』という一本の軸が見えるようになりました」

現在は高野一彦教授ゼミに所属して、企業のCSR(社会的責任)やコンプライアンス(法令遵守)をテーマに研究している。企業活動における事件や事故などの事案や判例を法学の視点から研究し、実際に企業の第一線で活躍している方々や他大学で企業研究をしているゼミと、研究報告や交流を行っている。小野山さんは、この夏、ある中小企業でのインターンシップに参加した際、学部で学んだ「企業のあるべき姿」と、現実との乖離に驚いたという。「理想だけではダメだと実感しました。どうすれば企業がもっと意識を高めてCSRやコンプライアンスを実践できるのか研究したいと思います」。10月16日には、第3回東京シンポジウム「これからの企業・行政の危機管理と社会安全学」(社会安全学部・大学院社会安全研究科主催)に参加し、1年半以上を経た東日本大震災に関する支援のあり方について、ゼミを代表して、ポスターセッションによる問題提起と独自提案を行った。



第3回「東京シンポジウム」で参加者に震災支援について説明をする小野山さん

社会安全学部で学んだことで多角的な視点で物事を見つめ、あらゆる事に疑問を持ち問題点を見つけて解決法を考えるようになったという小野山さんは、1年次生の時から社会安全学部の祭典実行委員も務めている。「1期生なのでゼロから自分たちで立ち上げていく必要がありました。先生などに面倒をみてもらえた高校時代と比較して積極性が身に着いたと思います。大勢の人間をまとめる大変さも実感し、組織づくりや運営など、良い経験になっています」

いよいよ12月から就職活動が始まる。「業種にはこだわらず、今研究している内容が実際に生かせるような企業で尽力したいですね」と語ってくれた。

小野山 伸和—おのやま しんわ

■1991(平成3)年、京都府生まれ。京都府立嵯峨野高校卒業。社会安全学部3年次生。10月に東京で行われた社会安全学部、社会安全研究科のシンポジウムでは、ゼミ代表としてポスターセッションを行った。趣味は音楽鑑賞。現在は京都のライブハウスでアルバイトをしている。

## 法科大学院で 学びながら出産&育児

現在も育児と弁護士活動を両立

●片山・黒木・平泉法律事務所 弁護士  
梶座 三千子 さん—法務研究科(法科大学院)2008年修了—



梶座さんが勤務する弁護士事務所

法科大学院を中核とする新しい法曹養成制度により、多様な経験や能力を持った法曹が次々に誕生し、裁判官・検察官・弁護士として社会で活躍している。現在、大阪市中央区の弁護士事務所に勤務する梶座三千子さんも、文系研究者から法曹を目指し、主婦として3人の子供を育てながら司法試験に挑んだ。妻・母・職業人という一人三役の弁護士が誕生するまでの奮闘ぶりを取材した。

梶座さんが関西大学法科大学院で学び始めたのは、他大学の文学部を卒業して7年後のこと。「卒業後は平安文学の研究者を目指して頑張っていたのですが、結婚して夫の転勤で関東に引っ越し、2年間ほどは専業主婦でした。でも当時は大変な不況で、夫の就業形態も非常に厳しいものでした。いつどうなるかわからないと危機感を持ち、女性が何か文系の資格を取って家族全員を食わせていける職業は何かと考え、弁護士になろうと決心しました」

そんな梶座さんを後押ししたのが、誕生したばかりの法科大学院制度だった。「30歳で第1子を出産して、法科大学院の受験を決めた時は32歳、ちょうど2人目を妊娠中でした。自宅で育児をしながら司法試験のための勉強をするような器用なことは、とてできないと思いました。そこで、子供を保育所に預けて勉強に専念するために、法科大学院に入学し学生として学ぶことを決意しました」

そして関西大学法科大学院の試験に合格し、第2子を出産後に入学。しかし大学院2年目に想定外の出来事。「3人目を妊娠していることが分かったんです。二兎を追う者は一兎をも得ずと言われますし、さすがにどこまでやれるか不安になりまし



た。でも法科大学院は3週間欠席することができるので、11月に出産して、その後は冬休みや春休みを利用し、夫や実母など家族のサポートも得て何とか乗り切ることができました」

懸命の努力が実り、大学院修了後の司法試験に一度で見事に合格。「自信があったわけではなく、合格して逆に不安を感じました。修了まで3年かかる未修者コースの私は、それまでは全く法律に関する勉強をしてきませんでした。2年で修了する既習者コースの人たちとは、知識レベルが違うという思いがありました。今でも勉強を継続しないと、一緒に仕事をする人たちに追いつけないという気持ちを持っています」

弁護士には公益活動が義務付けられており、梶座さんは今、大阪弁護士会の子どもの権利委員会に所属して活動している。「子供の権利が日本できちんと守られるための法整備や啓発活動について考え提案する仕事です」。そして本職の弁護士活動では、「私の所属事務所は家庭内の紛争に関する家事事件や消費者問題に強いので、その分野を専門にしていきたいと思っています」

弁護士の仕事の魅力を問うと、「いろいろな人に会えるところですね。すごいと思うような優秀な人に会える確率が高い。いっぽうで紛争などを通じて、人間というものの欲を目の当たりにすることもあり、それが面白くもあり悩ましくもあります」

梶座さんのように法学未習者で法曹の世界に興味を持つ人に対しては、「向き不向きはありますが、一通り勉強してみないと分からないこともあります。諦めずに、とことんやってみることが大事だと思います」とエールを送った。

梶座 三千子—くぬぎざ みちこ  
■1972(昭和47)年、京都府生まれ。98年大阪市立大学文学部卒業。08年関西大学法科大学院修了。同年、司法試験に合格。10年から現職。

